

昭和二十四年六月二十三日 第三回 郵便物認
行（毎月一回、十五日發行可）

（通第一九三号）

慈光

第十七卷

第六号

目
歎異抄第十章講話……………近角常観……………(1)
「寤告知可否」を読んで……………高原憲……………(7)

差別即平等……………平岡利子……………(10)

次
明暗二筋道……………上杉真証……………(14)

仏の音声を聞く……………花田正夫……………(19)

歎異抄 第十章 講義

近 角 常 觀

「念仏には無義をもて義とす。不可称不可説不可思議のゆえにと仰せそうらいき。そも／＼かの御在世のむかし、おなじこころざしにして、あゆみを遠遠の洛陽にはげまし、信をひとつにして、心を当来の報土にかけしともがらは、同時に御意趣をうけたまわりしかども、そのひとびとにもないて念仏申さるる老若、そのかずをしらずおわしますなかに、聖人の仰せにあらざる異義どもを、近來はおおく仰せられおうてそうろうよし、つたえうけたまわる、いわれなき条々の子細のこと。」

上來、講じたる九章は、前に述べたが如く、全く親鸞聖人のお教化をそのまま書きならべられたものである。これより以下の九章は、この聖人の教化に異なる異義を一々挙げて、その異なる所を歎きいましめ給うのである。故に歎異抄は、前九章と後九章と二つに分けることが出来る。

季と依

前九章は聖人の教化そのままである故に、あだかも「大學」の経の如くである。即ち経は、孔子自身の言葉であげたものである。後の九章は歎異抄の著者の筆になつたもので、所謂歎異抄の歎異抄たる所以で、つまり前九章にあらわれた聖人の教化に異なるものを一々訂正されたものである。それ故、あだかも「大學」の伝の如きものである、伝は子思が孔子の言葉を一々釈されたものである。

なおこれを教行信証に引当てみれば、前九章は、真実の教行信証、真仏土の如きものにして、後の九章は化身土のようなものである。

和讃の冠頭二首で云えば、前九章は「弥陀の名号となえつつ信心まことにうる人は憶念の心つねにして、仏恩報ずるおもいあり」といえる、積極的に信を勧めたものにして、後の九章は「誓願不思議を疑いて御名を称する往生は、胎宮のなかに五百歳むなく過ぐとぞそのべ給う」と云える、消極的に疑を戒められたるものである。

そこで、前にも申しし如く、その信といい、疑と云うは、そも／＼何を信じ、何を疑うのであるか。親鸞聖人と他の法然上人の御門下と左右に分れる分水嶺は何であるか。曰く、誓願不思議ということである、ことに大切なるは、この不思議と云うことである。

誓願不思議と云い、名号不思議と云い、仏智不思議と云い、言葉は変つても、つまり我等如き悪凡夫をたすけ給うという威神功德不可思議である。

近くは和讃の上にその例を取つて云えば、大経和讃に、

「南無不可思議光仏、鯁王仏のみもにて、云々」

「無碍光仏のひかりには、清浄歡喜智慧光、その徳不可思議にして、云々」

「至心信樂欲生と、十方諸有をすすめてぞ、不思議の誓願あらわして、云々」

「弥陀の大悲ふかければ仏智の不思議をあらわして云々」

その他、第十八願の他力の極致を示さるる時には、この不思議の言葉が欠けたことはない。これ、歎異抄に於いても劈頭、まず「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせ、往生をばとぐるなりと信じて」と、何よりも先にこの不思議を掲げて信を勧められたのである、而して、疑を戒めるにも、つまりこの不思議を疑うことをいましめらるる

のである。疑惑和讃において、反覆この仏智不思議を疑うことをとがめられている。

そこで歎異抄に於いても先ずこの章に於いて「念仏は無義をもて義とす、不可称、不可説、不可思議のゆえにと仰せそうらいき」と不思議を挙げて、この不思議を疑い、無義を義とする念仏に対して、異義をさしはさむ人の出来たことを歎きて、これよりその条々をあげるといふ前置きが、即ち第十章である。故にこの章は見様によつては、上來の九章を総括して「念仏には無義をもて義とす云々と仰せ候いき」と、前九章、聖人の御教化を綜合して、これにそむける異義を引出すように、承上起下の一章と見る事が出来る。

念仏には無義をもて義とす、不可称、不可説、不可思議のゆえにと仰せそうらいき。

この「無義をもて義とす」という一言は、他力信心の極意を示された御言葉にして、親鸞聖人晩年のお教化に常に口癖の如く申された貴きお言葉である。しかもこのお言葉が大師聖人の仰せであると、御自身いつも申さるるところである。

そこで、いずれに法然上人のお言葉として伝えてあるかと云うに、永観堂に伝える西山上人の筆なる法然上人の御消息に曰く、

義なきを義とし、様なきを様とす。淺きは深きなり。ただ南無阿彌陀仏と申せば、十悪も五逆も、三宝滅尽の時のも、一期に一度も善心なきものも、西東わきまえぬものも決定して往生を遂げ候なり。釈迦彌陀を証とす

建仁二年正月二日

源空

この御消息は実に簡潔なれども力強き御法語である。ことに建仁二年とあれば、あだかも聖人の黒谷の禪房に御入室の翌年である。して見れば聖人は、法然上人より度々このお言葉を拜聴されたのであろう。又法然上人も晩年に此お言葉を申されたものと見える。

古徳伝に曰く。沙弥隨連出家のちつねに聖人の御房につかえて配所へも随いたてまつりけり。御臨終のとき、隨連をゆめしてのたまわく、念仏は様なきを様とするなり。ただひらに称名の行を専らにすべし云々。乃至、隨連いわく、故聖人は念仏は義なきを義とす、ただひらに仏語を信じて念仏せよ、云々。

これによつてみれば、この「義なきを義とし、様なきを

様とす」とは、法然上人の御遺言と見ても然るべきお言葉である。しかしして親鸞上人も亦同様に晩年にこの言葉を喜ばれた。なお聖人の御遺言とも見なすべき、自然法爾章に他の法然上人のお教化たる自然法爾の言葉と共に書き連ねてお遺し下された先師相承の形身と載かねばならぬ。

さてこの言葉の味を順次味わい奉つて見よう。すでに、「義なきを義とし、様なきを様とす」と云う言葉それ自身が、如何にも何等のたくみもなく、繕いもなく、一有るがまのまに申された口調である。平たく言えば、あゝこう道理理屈もなく、かくせねばならぬ、かくする、こうするといふ様なつくりのないことである。なを審にこれを云えば、即ち法然上人の選択本願念仏のごく生粹を示されたお言葉である。そもそも選択本願の意味は、布施、持戒、乃至、孝養父母、奉事師長を扱ひすて、唯念仏を与えたものである。故に我等は布施を要せず、戒行を要せず、乃至孝養父母、奉事師長を要せず。唯、専称仏名の一つである。今無義というは、布施も要せず、持戒も要せず云々ということである。義とすとは、即ち念仏の一つを与えらるることである。我等は、戒を持つも、戒無きも、布施を為すも、為さざるも、唯念仏の一つであるということが、義なきを義とし、様なきを様とす云うことである。

そこで私は、この法然上人の選択本願の味が、親鸞聖

人の教行信証の上に於いては、全く言葉を変えて現れていることを発見した。上の第八章、非行非善の事を講ずる時引用した信巻の大信海の御自釈である。即ち

「貴賤縋素を簡ばず、男女老少をいわず、造罪の多少を問わず、修行の久近を論ぜず、行に非ず、善に非ず、頓に非ず、漸に非ず、定に非ず、散に非ず、乃至多念に非ず、一念に非ず」

というは、即ち選択集に伝える布施持戒乃至孝養父母、奉事師長を選びすてたる意味にて、義なき有様である。同じく御自釈の引続きに、

「唯これ不可思議、不可称、不可説の信樂なり」

とあるが、専称仏名の念仏にして、即ち義とすと云う味である。そこで今の本文には、不可称、不可説、不可思議のゆえにと申されたのである。かく味い来れば、選択本願の釈と、大信海の釈とは、全く符節を合せたるが如くである。

序ながら、選択集と教行信証と趣の異なる点をあげて見れば、選択集は、諸善万行を選び捨てて、只念仏の一つを選び取ることを示されたのである。何れの行も及び難い、唯念仏ばかりじゃ、と追いつめたのである。故に選択本願の釈には、第一義を悟る智慧も、発菩提心も、何もかも消極的に選り捨ててある。しかして教行信証は、その選り取り

りたる念仏より、あらゆるものが積極的ならわれ来ることを示されてある。そこで教行信証には念仏のことを、第一義乗と云い、信心のことを淨土の大菩提心と云うてある。かく選択集は消極的に諸善万行を選び捨て、教行信証は念仏の一つより、無量の坊徳、一切の善本、即ち一大蔵経を積極的に含有し来るのである。

これもとより選択集に無いことではない。即ち、念仏諸行を比較して、勝劣の義を立てる時は、念仏の中に、四智、三身、十力、四無畏等の内証、相好光明、説法利生等の外用一切の功徳を撰むと云うことは云うてある。されど、諸善万行を捨てて念仏に入るといふ、消極的方面を云いあらわすが主眼である。かく絶対に唯一の念仏を取るが故に、この念仏は絶対不二のものとなつて、すべてのものを具足する積極的なものである。その方面を著しく云いあらわしたが教行信証である。

今、義なきを義とす、と云う言葉でも、法然上人の言葉では、何等のはからいもないのが善いのだと消極的の方面を主とされてあるのである。然るに親鸞聖人は、そのはからい無くして、如来の御はからいによりて、不可称、不可説、不可思議の功徳を与えらるると積極的の方面を顯著に示さるるのである。

これはここばかりではなく、すべてについてこの趣きが

ある。教行信証の骨子である如来廻向ということは、法然上人には明に現れておらぬ。ただ念仏は不廻向であるという消極的方面の一言があるばかりである。その反面を堂々として積極的に開顯したのが如来二種廻向の浄土真宗の骨目である。又法然上人が信心靜論の時「信心の変わり合うておわしまさん人々は源空がまいらんずる浄土へはよまいらせそうらわじ」とある消極的の言葉より、遂に、浄土に報土、化土の区別をたて、三願、三經、三機、三往生の積極的の建立があらわれて来たらしい。

今も法然上人が何気なく、「義なきを義とす」と申された一語は、誓願不思議、仏智不思議の積極的教化を生じ来り不可称、不可説、不可思議の積極的功德が開示せられたのである。

かく如来の誓願不思議を信ずることをこの一語に示したまいて、「義なきというは、善からんとも、悪しからんともはからわぬ」ことである。「義とする」は如来のはからいにまかすことである、と示された。

ひそかに考うるに教行信証には文句として「義なきを義とす」という語はない。しかし勿論その意味はあつたに違いない。帰命の御自釈に、命の訓にハカヲウナリ（計也）とあるは、如来の御はからの意味である。而して、義の字

また他力と申すことは義なきを義とすと申すなり。義と申すことは行者のおの／＼のはからうことを義とは申すなり。如来の誓願は不思議にまします故に、仏と仏との御はからいなり。凡夫のはからいにあらず。補処の弥勒菩薩をはじめとして、仏智の不思議をはかろうべき人は候はず、しかれば如来の誓願は義なきを義とすと、大師聖人の仰せに候き。

不可称、不可説、不可思議はすでに上に引用した信巻、大信海の文にも出ている。されと行巻にも同様に出ている。曰く。

弘願一乘海は、無碍無辺最勝深妙不可説不可称不可思議の至徳を成就したまへり。何を以ての故に、誓願不可思議の故に。

しかしてこの意味を和讃に、

五濁悪世の有情の 選択本願信すれば

不可称不可説不可思議の 功德は行者の身にみでり、
選択本願を信ずるとは、無義をもて義とすることである
而して後の一句は、草稿和讃には「功德は信者ぞたまわれ
る」としてある。

「そもそもかの御在世のむかし、おなじこころざしにして
あゆみを遠遠の洛陽にはげまし、信を一つにして、心を
当来の報土にかけしともがらは、同時に御意趣をうけた

にハカヲウと訓ずることは、証巻の、「体一如にして義をして分て四と為す」と云う義の左側にハカヲウとある。かくこの意味はあつた面影を見ることが出来る、されど明了にこの語を愛樂せられて、懇篤に教示せられたのは晩年に著しかつたものと見える。末來鈔に度々くりかえしたまいし法語を拝読するが何より有難い。

末來鈔、第二章に曰く。

他力と申すことは弥陀如来の御ちかひのなかに選択撰取したまえる第十八の念仏往生の本願を信樂するを他力と申すなり。如来の御ちかひなれば他力には義なきを義とすと聖人の仰せごとにてありき。義というは、はかろうことばなり、行者のはからいは自力なれば義というなり。他力は本願を信樂して往生必定なるゆえに、さらに義なしとなり。しかればわが身のわるければ、いかでか如来むかえたまわんとおもうべからず、凡夫はもとより煩惱具足したるがゆえに悪きものとおもうべし。またわがこころの善ければ往生すべしと思ふべからず、自力の御はからいにては真実の報土へ生ずべからざるなり。行者の各々の自力のみにては憍慢辺地の往生、胎生疑城の浄土までぞ往生せらるることにてあるべきぞ
とうけたまわりたりし、云々。

同鈔、第七章に曰く。

まわりしかども、そのひと／＼にともない念仏申さるる老若そのかずをしらずおわしますなかに、聖人の仰せにあらざる異義どもを、近來はお／＼仰せられおうて候よしつたえうけたまわるいわれなき条々の仔細のこと

聖人御在世の昔、常陸の国よりはる／＼聖人を慕いて上洛せられたる有様、見るが如くである。了祥師の考に、この章と第二章とを以て、歎異鈔の著者は、即ち常陸より聖人をお尋ねして承りた人の一人であると申されたは、如何にも適切なる犀利なる觀察と敬服せねばならぬ。されどこれをもつて本書は如信上人の作でない詭掇とするには余りに力が弱い、たとい最須敬重絵詞に、如信上人が幼少の昔より長大の後にいたるまで禅牀のあたりをはなれず、学窓の中にちかつき給いたれば」とあればとて、少しも東国に居たまわぬ、東国と京都との間を往復せられぬ筈はない。

唯田坊なり如信上人なり、誰にしても、自らも、他の人々も、聖人を慕い上洛して、まのあたり聴聞せられた、それ等の人々は心一つにして同じ真実報土に往生する一味の安心に任せしも、其人々に伴いて聴聞せられた人となれば、色々勝手なことを言い、我等がはからいを皆打捨て、如来のおはからいにまかすべき無義のものたる念仏に、異義を言う人の出来たことを慨歎されて、己下一一その条々を下に挙げると標示せられたのである。——求道より——

『癌告知可否』を読んで

高 原 憲

七十七才の老人がいました。十二指腸潰瘍であつたが、すつかり切除してしまつたと告げられ、入院三週にして彼はよろこんで退院して来ました。

退院後ももなく、大丈夫だといわれたのに、胃腸の調子が変わるので主治医の来診を求めていると手当をうけていました。次第に不安になつてきた彼に招かれて私も出かけて行きました。

仏教者で漢詩にもたけていた彼は、七言絶句の自作の辞世の詩を色紙に書いて、自分の枕頭にかかけていました。それほど覚悟は一応出来ていましたが、患部はすつかり取り去つてしまつたから大丈夫だと医師から折紙をつけられた彼としては、あと長くない余生を楽しく暮そうと考えたのは無理からぬことでしょう。

よく診るとすでに胃癌の末期であります。外科で手術の結果手のつけようのない程の胃癌なので、患部はそのままにして、もう大丈夫だといわれて退院して来たらしいので

がて消えるから安心しなさい」と叫びます。「患部はとりに去つたから大丈夫だ」という医者言葉と同じく、正にひとごとであります。

この病人は全く不安極らない状態であります。二河白道の旅人には、この刹那「汝一心正念にして直ちに來れ我能く護らん」という招喚の音が西岸からかすかに聞えて来ます。このよび声をたよりに私はまつしぐらに進むより外にありません。デパートの下である地上に救いの網がしかれて『この網の上に飛びおりなさい』という招喚の声を耳にした人は、何のためらいもなく、この網の上に飛びおりるであります。

私共がたえず開法につとめるのは、この招喚の声を聞く耳をいただき、この救いの綱を見る眼を恵まれんためであります。

明日ありと知るよしもない私の命は今日一日でしかありません。今日一日を終えて夜の床につくとき、長い間苦勞を共にした妻に御礼を述べ、念仏と共に今日一日の命を終るのです。招喚の声と共に救いの綱に身をまかせるのであります。

この老人は心から喜んでくれました。そして愛用していた珠数一連を形見として私に呉れました。

その夜静かに夫人にお礼をのべて念仏と共に一日を終つ

す。本人は勿論真相は何も知りません。それから二、三回往診して彼の病状と心境を見届けた上で、私はこの病人に告げるのであります。

「あるとき高層建築のデパートの二階から火が出ました二階から上層にいた沢山の客達は、安全地帯の屋上へと逃げて行きました。この屋上には動物園があつて猛獣がうなつていました。万一屋上まで火が燃え上つてきたら猛獣にやられる。これを避けて屋上から飛び下りたら勿論いのちはない。進退きわまつた姿であります。

これは死病をかかえた人の立場であります。否これが私共の姿でありますまいか。善導大師の二河白道の比喻の中に出て来る旅人の、足許の四・五寸の白道の両側には、火の河と水の河とがせまり、うしろには群賊悪獸が迫つてきているおそろしい光景が、そのままこのデパートの客の姿であります。屋上から見ると地上には沢山の野次馬連がいて、屋上の人々へ『大丈夫だ、火はや

た彼は、翌朝また一日を恵まれて、またその一日を生き抜きました。そして三日目には静かに念仏往生を遂げました。

三十才で胃癌で仆れた青年がいます。十二指腸虫症の診断をうけ、その虫の駆除もやつたのですが、其後不安なので私の外来にやつてきました。

診ると正しく胃癌であります。外科へ移して開腹すると既に手がつけれられない程の病状です。患部をそのままにして約二週間して自宅に帰り、静養することになりました。病状については本人には、肝臓が悪かつたので手術をしたという外は何等真相は告げられていません。

自宅では本人は勿論、一家中の人が私のすすめを受け入れて二木先生の正食、即ち玄米めし、野菜と水だけの素食生活に切りかえました。

数ヶ月仲々元気でいましたが、次第に危期が迫り、彼は自分の病状について不安となりました。自分は手術をうけたのに近頃どうも元気が出なくなつたと訴えるのももつともなことであります。

家ぐるみまじめな仏教徒で、彼自身も熱心な求道者でありました。いよいよ彼に真相を告げべき時が来たのです。

末期の癌の予後について、断言出来ることは、ただ今日一日の命であるということにあります。これは病人だけで

はない、現に健康であると信じている人も同様でありませぬ。この青年は何等動ずることもなく、三十才まで生かされたことをよろこび、そしてその日から彼は日記をつけはじめました。その日記はそのまま彼の遺書となり、死の数日前まで書き続けられました。(彼の兄の手によつて小冊子にまとめられ「死の宣告を受けて」と題して京都大谷出版部から出版されました)

明日ありとしるよしもなき我なれば今日一日を生き抜かんとおもう

日々の生活こそ私共の一日の歩き方でなくてはなりません。

私は一高時代、御縁あつて近角常観先生の御教化を頂く身となり、その後今日まで五十余年の間、開法のお座を恵まれていきます。然し念仏を唱えながら、お浄土の存立については不安な私でありました。開法と周囲の善知識との御縁によつて、私の人生方向はどうやら決定して来たようであります。念仏をコンパスとして日々刻々と人生最後の港である彼岸をさして方向を定め、船を進めさして頂いております。この難度海へ乗り出したら決してあと戻りは許されないのであります。

痛告知可否について、諸先輩の論議を誌上(九大医報)で読ませて頂きました。大体告ぐべきではないという意見

差別即平等

私共が高原先生にお世話になるようになって十年たちました。主人は昭和十一年東大卒業後三菱の長崎兵器製作所に就職しました。二年位おくれて横倉廉吉さんが大学をやめて会社就職して来られましたから、その方からいつも近角常観先生のことを伺つておりましたそうです。

昭和十六年頃上京した折に常音先生にもお目にかかったことがあるそうです。又横倉さんから高原先生のことを聞きましては、自分も直接お話を聞かせて頂きたいと何時も思つていたそうです。

そうこうするうちに長崎に住むようになって二十年経ちましたが、その間、時々問題にぶつつかり、よき師に遭いたいと思ううちに時間が解決してくるので何時もウヤムヤのうちに過ぎてしまつていたそうです。私と結婚してからも時々困つておりました。近角先生の「懺悔録」や「信仰の余瀝」などの御書は二人で愛読しておりましたがよく分りませんでした。

のようであります。結局その人の人生方向が決定しているか否かで決めるのではありますまいか。
人生最後の目標をねらつて、今日一日を生き抜く人が人生最大の勝利者であると、よき人はたたえておられます。

貞信尼の歌

はからわず南無阿弥陀仏と称う外、思うも云うも迷いなりけり

西へ行く道としなくばなかなか、老の寢覚めの淋しかるらん

すなおなる柳の枝を見るにつけ、ゆがみながらに南無阿弥陀仏

蓮台に乗り得るまでは妄念のころながらに南無阿弥陀仏
歎きつつ闇路をたどる賤の女に、我をたのめの弥陀のおたのみ

けたいして歎くころのなきときも、ただそのままに南無阿弥陀仏

夢の世を夢と思うも夢なれど、南無阿弥陀仏はまことなりけり

待ちかねて歎くとまでのおなさは、たれに聞けとのころつくしぞ

平岡利子

昭和二十八年頃、高原先生が御病中の奥様にお聞かせしたいと島根大学の川上清吉先生を講師に「歎異鈔」の講話会を三日間六回にわたつて開催されましたので、私共も聴聞させて頂きました。其時深い感銘をうけましたことと、その講話会の期間中南の長崎には珍らしく、帰りのバスを待つ間、体がブルブルふるえる位寒かつたことが忘れられません。

真宗の家庭に生れ育つた私ではありますが、そしてよい門徒ではありましたが信仰には無縁の家でありましたので、すばらしい親鸞聖人の御法話を聞きましたのは始めてで、主人もそうでした。

そのうち自然に御縁が熟したと申すのでしようか、又々主人がどうにもこうにもならないようなことになりまして非常に苦しみ、六月頃から睡眠もろくろく出来ない状態となり、苦しみのあまりついつい私までも眠らせぬ事になりました。こんなことで主人は心身共に疲れ果てて、秋の終

り頃にはゲツソリと痩せてしまいました。それでも会社はどうにか休まずに勤めていましたが、朝、重苦しい姿で出かける主人を眺めては、どうか今日一日何事も起らない様にと思い、夕方帰宅するとホットしながらも、又暗い気分の夜を思うてはどうしようもない気分が襲われていました。夜二人でいろ／＼のことを繰り返して／＼話し合いますが、どうせ何も分らぬ二人が話すのですから、解決する筈がありません。全く泥沼の様な毎日でした。私は主人がこんな苦しい所に居ては取り返しつかぬ状態になるかも知れない、いつそ会社を諦めた方がよくはないだろうか、けれどもこの半病人の様な主人を連れてどうして生活して行こうかと一人で考えておりました。

そのうち主人が「僕の今のこの問題は今に始まったことではない、もう繰り返してはごめん。何とか解決することを一生の仕事にしたい」と申しまして、直ちに高原先生にお話を伺うことになりました。

高原先生は明治二十五年のお生れで一高在学中は徳風会で近角常観先生のおみちびきを得られた方で、長崎市でお医者をしていられます。御伺いしたのは昭和三十一年十二月二十九日の夜のことです。先生からは次の様な御親切なお話がありました。

一、人生五分五分の世界に住んでいて綱引きは止めなき

下さる様に感じられる位に御親切に、事々に就いてお話をして下さいました。

その後郷里の主人の両親が病氣と老齢のため私共と一緒に住むことになりました。高原先生は私に「よき砥石が出来た」と仰言つて下さいましたが、その痛いこと砥石どころではありません。

父の方は肺ガンが進行して高原先生のお話も始めは仲々理解し難いようでしたが、死期の近づくにつれて

何もかも我一人のためなりき

今日一日のいのちとおとし

との先生の御言葉がよくわかる様になつて大変安らかに感謝の中になくなりました。

母はひどいゼンソクと老人性白内障で不自由な毎日でした。高原先生が私に「他人である嫁を通して孝行をするように」とおつしやいますのでその様にいたしました。一緒に暮すうちに何処にでもある様な事が起つて私は苦しみ母も不愉快な毎日になつてしまいました。悪くなると何でもないことまで悪くなつてしまいます。

高原先生には往診して頂いておりましたが、私はどうしてもゆつくりお会いしたくて、主人と先生のお宅に参りました。そして母のこと、主人の兄弟其他いろいろの事など申し上げました。先生は始終黙つて聞いて下さいましたが、

い。

一、人生最大の目標は方向を頂くこと、どんな船でも羅針盤がなければ漂流船である。

一、差別ある世界の無差別——大慈悲の前には、線香もローソクもランプも光を奪われる。

その時、主人が「暗い自分で困つております、もう少し明るくならないのです」に申しますと、先生は、「信仰生活とは自分自身を知ることである。キチガイがヘラヘラと笑っているがあれはキチガイだからだ。信仰を得ることは、鉄と磁石は同じ鉄であるが、分子の配列が違うだけで、唯人生の方向がきまることだ」と仰言いました。

その夜は数ヶ月ぶりに主人は熟睡いたしました。私も一諸にお伺いしましたが、それまで私は主人が困つているとばかり思つていましたのが、主人を通じて私が困つていたことがよくよく知らされ、私も心から楽な気になりました。先生から、妻の在り方についていろ／＼と御話をさせて頂きました。

こうして急場しのぎはしましたものの、愚かな私共にこれですつかり安心を得られる訳がありません。それから毎日のように先生のお宅に伺いましたが、奥様のお病氣も段段に悪くなられる頃でしたが、何時も待ちかねていて

私の話が終りますと、

「あなたの言うことはよくわかる。然しあなたは今迄何のために聞法して来ましたか」

と仰言いました。私は何とお答えしてよいか解りませんでした。先生はやがて

「暗闇でローソクが灯つていますね。そこへ懐中電灯を照らすとローソクの明りはうすらぐ。懐中電灯がローソクより明るいとお慢しても、其処へ電灯がパツとつけば、ローソクも懐中電灯ももう値打はない。然しそれは皆闇の世界のことで、太陽が出て輝けば、電灯も懐中電灯もローソクも皆同じで無価値です。差別があるままに差別がないのです。

あなたが目も見えずゼンソクのひどいお母さんにとんなにしているかよく知つていられるけれども、自分をよくしている、相手にわかつて貰えない。相手が悪いと云つてもそれは闇の世界のことで、大慈大悲の光に照らされればおたがい五分五分、唯手をついてひれ伏すばかりではありませんか」

と懇ろに教えて下さいました。

本当にそうでした。私はこの話は何十回、何百回聞いたかわかりません。その都度そうだ／＼とうなずき、よくわかつた積りでした。でもこうしてみると少しも自分のもの

になつていませんでした。唯「はなし」として聞いていたに過ぎません。こうしてこのローソク、電灯の話は私の終生忘れ得ぬものになつてしまい、何彼につけ私にブレイキをかけてくれます。

その母ももう亡くなり六月にはもう満三年になります。亡くなつた父を思い母を憶う時、父を通して母を通して聞法させて頂いた日々が懐しくなりますと共に、父も母も懐しくなつてまいります。

それから先生には幾度となくお話を伺つておりますが、聞いても／＼仲々自分のものにはなりません。

主人は以前よく淋しい／＼と申して居りました。今でも空しさに変りはないかも知れませんが、思いかえしの出来ることが、それを口に出さずに済むのかもわかりません。

高原先生は以前にこんなことを仰言いました

「平岡さんは昔困つていた時どうしていただろう。さぞ淋しかつたらう」

と。本当に有難いことです。私共二人で何時も話し合いますが、聞いても／＼変らない私であります、唯一つ何物にもかえ難い、そして私だけのためにあるものを頂いて、こんな有難いことはありません。

× × ×

明 暗 二 筋 道

一、最後の聴聞かも知れない

昭和三十三年九月のこと私は山口県のある寺の客室に、仏教婦人会の追吊会の講話をすませて、三四名の幹部の方々といろ／＼世間話をしていた。しばらくすると「ごめん下さい」と細々しい声をかけながら一人の老婆が入つてきてしずかに坐つて丁寧に挨拶をした。この老婆は白髪をキチンと手入れしていて、目玉のクリクリとしたやさしい丸顔が印象的である。八十歳を越しているのである、腰は二重に曲つて部屋の中を歩くのでも杖がほしそうである。

この老婆は次のように語つた。

「……私は二三年前から心臓病で寝たり起きたりしています。今年八十二歳になりました。近頃は心臓がドキドキして寝ている日が多いのです。

このたびお彼岸の法座が三日間つとまるという案内を頂きます、私は寝ていましたが、このたびの御法座が私の最後に参らせて頂く御座かも知れない、なんとかして

若し我等が、真実に煩惱の汚れない菩薩(聖者)であれば、人をたすけ送けることも出来よう。恰も鴨や鷺鳥が水中に遊泳してもすこしも濡れないように、菩薩ならばどんな濁悪の世界にあつても、悪人に交つても少しもその濁りにも悪業にもけがされないうで、迷うている多くの人々を救済することも出来るであろう。

然しいやしくも凡夫と名のつく我等では、自分自身がすでに濁れた罪業の人間であるのだから、どうしてか積極的に濁悪の世に生れて人々を救済しようなどといえるものか。鶏は水中に追いこめば濡れて溺れる。凡夫の身をもつて迷うている人々を救いとげようとすれば、俱共に溺れてしまふだろう。

竜樹菩薩は「大品般若経」を智度論に引いていられる。それに「凡夫が発心して穢悪の世にありながら他の衆生をすくおうという願をたてても、仏の意にはおよろこびにならない」とある。

菩薩はその意を喩をもつて示して居られる。「四十里四方も張りつめた氷の上に、一升ばかりの熱湯を浴びせてもその時には少し氷が融けたようでも、一夜のうちに湯をかけたところがかえつて氷が厚くなるようなものだ。凡夫が汚濁の世に発心して他の衆生救済などは大それたことで、食欲、瞋恚の煩惱がさかんで、わが意にかなえば益々これを貪り、わが意に満たないと瞋るといふうなわけで、却つて煩惱を増し、共に悪道に墮して行くばかりである」と。

上 杉 真 証

お参りさせて頂くと思ひました。しかし初日の法座には元気がなくお参りする気がありませんでした。昨日は家の者に厘の弁当をこしらえてもらい、朝から出かけたが途中で心臓の動悸がドキドキと高くなり、神社の石垣のところ腰を下して一と休みしましたが、ナカナカおさまりません……とうとうそのまま後返りをし、家に帰りました。そして明日こそはと思つて、薬をのんで早く寝こみました。おかげで今朝は少し楽になりましたのでお参りして今朝の御法座からお話を聞かせて頂いて居ります」

ここまで話すと、その老婆は深い呼吸をして一息入れたがその様子はナニか胸一杯思いつめていたことをヤツと話したというように私達に受けとれました。……そしてその老婆は先客の婦人達の顔をながめ、少しはばかるようにして最後の切札を出すように

「御講師様、御法義をお聞かせ頂いている者は、いよ

いよ死ぬるときには、先が明るくなるものでしょうか、暗いまんまでもよろしいのでしょうか？」とたずねた。

二、生死巖頭に苦悩

自分の後生のことが気になつて、この老婆と同じ質問をする人は多いがそのたずねる心持は千差万別である。死ということを目前に感じ、日夜死の不安と闘つていて、聞かずにいられぬという人や、なんとなく自分の死を引きよせて見て、自分の暗い心に不安を感じてたずねるといふ軽い気持の人々もある。いずれにしてもこれらの人々に

「仏法が聞えたら心の中は明るくなります」とか、

「仏法が聞えても私達の心のなかに暗いまんまでよろしい」とか、

どう答えても、この疑いをもつている人のなかには、言葉は分つても、本人の腹に入つた解決にならない場合が多い。

私がそんなことを考えながらしばらく黙つてしていると

「私はこの前のお盆の時の御講師さんにもお尋ねしましたが、その時には『先は明るくなる』と仰言いました。

また他のお寺さんに聞きますと『暗いまんまでよい』と申されました。どちらが本当なのでしょうか』と不安な面持で懸命に問うのであつた。

かねばならぬとすれば「暗いまんまでよい、仏様が助けて下さるのだから」ではすまされない心の不安が生れてくる。やはり法義を聞いた以上は明るくならねばならぬのではなからうか、聞いても暗いでは、御法義を聞いた意味がないではないか。死んだ先の話でなくて、死を目前にした自問自答がそのまま明暗二道の迷路に立つ生死巖頭の迷いとなつて苦悩するのである。

三、一度は蓬着する関所

この自問自答は、死を真剣に考え、また信心獲得ということに正面から取組んだ人々は必ず一度は蓬着する重大な関所である。

今日浄土真宗の布教が空虚な力のないものとされ勝ちなのは「死んだらお浄土」の一本槍で、「死んだら」の手前に「死ななければならぬ立場」に追いこまれ、死に直面し、死と対決している者の方になつていないのではなからうか？また「如来の救済も疑いません、浄土に生れることも信じています」といい切つていられる人達の中に、死の壁にぶつつかつて何十年の信仰が一朝の夢と消える人々が多い。

仏教が転迷開悟を目的とし、安心立命を最重要課題とするのは死後のことを問題にするのか、死という壁にぶちあたつたときの心の不安を問題として解答しているのか？

死を考え、死後のことを思い不安にさらされている者の

このお婆さんは死という一大事を目前にして、今まで何十年とお説教を聞いたが、はたしてこれでよいのだろうか。信心頂いて救われたものは、死というものを眼前に見れば、もつと明るい気持にならねばならぬのではないだろうか。それなのに自分の心をのぞいて見れば、明るいといいきれず、むしろ正直なところ暗いと答えた、本当に御講師さんの云われる通りに、心は明るくなるものだろうか？

「明るくなる」ということであれば、暗い心のとれない自分は偽信者であり偽同行であつたことになる。また他のお寺さんの仰言るように「暗いまんまでよい、それが凡夫の自性だから」と、お言葉に安心して見るとこれによいのだろうかという不審もいらぬし、起りもしないよりに思われる。煩惱具足の凡夫を救うための御本願のおころにかなつていようである。しかしこれで解決がついているのだろうか。

人間はどうせ死なねばならぬのだから、死後の用意にお説教を聞いて、この不安な暗い気持を「そのまま来いよ」の如来のお呼び声に大安心して解決したつもりであつたが今いよ／＼死を目前にして見ると、暗いまんまで死を迎えることは心細く、死後には極楽浄土があるだろうか、この目前の死という大きな壁にぶつつかり一人で対決して行死にはないのだろうか？

死後のことを思つて不安がるから極楽浄土を説いて聞かせるのだといわれるかもしれない。然し目先に死という現実問題にぶつつかつて死を恐れる心におちいるとき、この世と浄土との間に死という大きな壁が出現する。この死に對する心がまえはどうすればよいのか？死んだら浄土といくらわが心に云いきかせて見ても、今の自分の心が真暗とまでいかになくても、薄気味の悪い心に氣づけば「これでよいのだからか、後生は明るくなるものか、暗いまんまでよいのか」という疑問が出るのも当然で、この切実な不安が解決されてこそ浄土の教が光を放つてくるのであり、信心の行者の上に無量光明の土として出現するのではないか？

四、自己一人の問題として

私はここに三田源七老人が若い日、後生のことが苦になつて三河の野田村の和兵衛同行を訪ねて「明暗二宿」について問うたことを思い出す。

源七翁がたずねた時、三河の和兵衛同行は死の三日前、臨終の苦しみにあえぐときであつた。源七翁は「この篤信な人であればこそ未来は明るいものだろう、一言聞いて見よう」と、骨と皮とに瘦せ衰え見るに見かねる老同行に

「一寸お尋ね申上げます。私は後生が苦になつてお育てを蒙ろうと思つて参りました。あなたは今いよいよ

出て行かねばならぬと思ひなされたら先は明るいものでございましょうか？暗いものでございしますか」（信者めぐり）と尋ねると、和兵衛同行は、

「いよいよ此の場になつて後生が明るいか、暗いかとはよう云つてくれました。病氣の様子や、気分のよしあしは尋ねてくれるお方はあるが、この私の後生を案じて、行末一つ聞いてくれる人はない、南無阿弥陀仏、南無阿彌陀仏」

と、心の明暗について答える前に、源七翁の問いを如来聖人の御催促と聞いて我身の仕合せを喜んでゐる。すると

「どうかこの同行のようになりたいものだ、ならねばならぬと思うが、しかし今日この質問をしたのはこの和兵衛同行を喜ばせるために聞いたのではない、自分自身の明るい暗いを聞きたいためであつたのに!!」

と愚痴をこぼしている。すると和兵衛同行はニツコリして「後生は明るいかと云えば、明るうもなし、暗いかと云えば暗うもなし、唯病氣が苦しい一つよりないわの。

若しも明るい暗いを此方で見にやならぬようなことなら無になる。御方があるで、南無阿彌陀仏々々々々」とサモ嬉しげに念仏を称えている姿を見て、源七翁は、この一言千万両の価値と味わつてゐる。

明るいか暗いかを我が心の上に見定めようとして聞きま

わり、明るいと云ふれば明るいところに、暗いと云われればまた暗いところに宿を取らうと、我が心の上に大丈夫らしいものを見出そうとしてあせつてゐる求道者源七翁に「若しも明るい暗いをこちらで見にやならぬようなことなら、無になるお方があるで、」

の一言は一大鉄槌であつたであらう。私はこの二人の同行のことを思い浮かべながら、私の前でモジモジしている老婆に向いました。

五、忘れえない老婆の姿

私の前に坐つてゐるこの老婆も自己の内心の不安に苦しみ病氣を押して来たのであらう。然し言葉だけ聞いたのでは何時まで経つても救いにならない。そこで私は

「お婆さん、私は今まで死にかけたという病氣にも災難にも逢つたことがないので先が明るくなるものか、暗いまままでよいのやらわからんナ」

と答えた。老婆は「へエ!!」と云いながら円い眼を一層パチクリさせていた。……しばらくして、

「お婆さん、如来様の智慧と、あなたの智慧とどちらが多いかな？」

と尋ねると「そりやあ如来様の方がズツと多いですワ」と答えた。

「お婆さん、それだけ分つていればよろしいではないか

ナ!!あなたが今、後生は明るうなるものか、暗いままではよいのかと、一生懸命になつて尋ね廻つてゐる心配はあなたよりズツとかしこい如来様にまかせたらどうですか？

私はネ、終戦直後の頃トマトを作つた。ところが木は大きくなつて卵位の大きさの実が出来たので喜んでゐると寺の世話人がやつてきて、「このトマトはダメですナ!葉がみんなまくれていますから病氣ですがナ」『ナンで病氣になつたのかナ』『サア分りませんが、この畑に去年何が作つてありましたか』『母に聞くとナスビを作つたそうナ』『それで分りました。ナスビとトマトは親類すじですので連作を嫌います。同種類のものを作るには石灰をまくなり客土をするなりしないといけませんナ』といいながら一と思つて、

『御院主さん、野菜を作るにもナカナカ馬鹿では出来ません。この畑には去年や一昨年にナニを作つたか、また来年や明後年にはナニを作らうかと考え、自分の全部の畑を頭に入れて連作にならぬよう配分しないと良い作物は出来ません』といいきかされた。

お婆さん!!畑に作る野菜一つにしても、畑の過去と未来を考へて現在植えるものをきめるのです。お婆さん、あなたはさつき如来様の方がズツと賢いといひなかつた

がよく考へて御覽なさい。私達は今死を前にして、後生は明るい暗いかと、ありもせぬ智慧をふりまわして身をいたため心を碎いて心配しているが、如来様は十劫の昔から私の過去も現在も未来も見通して『出離の縁あることなし』と見抜き、死の壁につきあたつてあわてふため不安な心を知悉されて『この親の智慧にまかせよ、この親が護つてやるぞ』との呼び声が、如来様のやるせない大慈大悲心であります。我が心の暗い、明るいを知ることで定まる往生でなくて『如来わが往生をさだめたまへり』とて、まる／＼の如来様の御計らいだけで永劫の仕合せをこうむらせて頂くのです。我がをりきんで明るくするのでなくて、一寸先は闇の心の中に如来様の三世を見通されたかぎりなき智慧を仰いで、絶対のお慈悲に心安心させて頂くばかりです。この親様の真意に気づかせて頂けば我が心の明るい、暗いは問題ではない、地獄であろうと極楽であろうと問題ではない、如来様と御一緒なればどこへ行こうと、煩惱の子の知つたことではない、如来様の御計らいあるのみであります……」

と云うと、この老婆は静かに両手を合せて念仏裡に明るくやさしい笑顔を浮べて挨拶をしながら立ち去つて行つた。その後姿が尊く輝いてゐるようで、今もつて私の忘れられない老婆の一人であります。

以上。

仏の音聲を聞く

花田正夫

聖徳太子が随喜讃仰されました勝鬘經の初めに次のように説いてあります。

波斯匿王と末利夫人が世尊の導きをうけ始めて間もなくすでに王妃となって他国に嫁している愛娘の勝鬘夫人を思い浮べ、早速書信をもって、世尊の御徳をたたえて、仏法に帰依するように勧めました。

夫人はこの父王の書を読むなり、また世尊にお会いしないのに、驚きと喜びのあまり

「私は仏の音聲を聞きました。こんな音聲は今までにこの世でお聞きしたことはありません。

私は一切衆生のためにこの世にお出ましになられたと承りますが、無智の女人の私のために、慈心を垂れて御身を現して下さいませ」

と申し上げますと、世尊はこの声に応じて、空中にお姿を現され、清浄の光明を放たれて、くらべようもなく勝れた

ほって御覧、あなたごなたに仏のお呼び声が聞える」と申されました。

先生が亡くなられて二十七年の今日、「歎異抄は仏のお声をきく名所である。あちらにも、こちらにも仏のお声が聞える」の一句が何時も胸を去来して、大きくうなずかされて居ります。その二三を誌しましょう。

先ず第一は、第一章の

「弥陀の本願には老少善悪の人をえらばれず」

の一句であります。相對差別のみの人生、台所の隅から国際場裡にいたるまで、老少、善悪、貴賤、賢愚、等々のへだてとさばきか、利害による妥協の声ばかりであります。そうした世に、老人には老人の苦を、若人には若き日の悩みを、善人は善の繩に苦しみ、悪人は悪の鎖にしばられる傷ましさを、それぞれに広い御理解と深い御同情をもって向うて下さる、平等にして差別なき弥陀仏のみ声が聞えるのであります。

ことに私の生涯を決定して下さった慈声であります。と申しますのも、初め、キリスト教の愛の教を字んで、私自身は利己の一念を離れぬ身と知らされ、親も師も友も火鉢あつかいしか出来ぬ、火鉢は冬は調法がり、夏は

御身を示現されました。

このように夫人は父王の書を読むや否や、まだ直接にお会いしないさきに、仏の音聲と尊容に接して居りますが、私共は世尊の滅后二千五百余年を経ました今日に生れて居りますけれども、親鸞聖人のお言葉を拝して、そこに釈迦、弥陀二尊の徳光に接し得るのであります。

池山先生はある時

「ほととぎすの名所は、宇治と大きくがまだ行ったことがない。京都でも時にはそれらしい声を聞くけれども、確かにそうだと断定が出来ない、まだ本物を知らないのだから。

然し弥陀仏のお呼び声はたしかに聞いている。しかもそれを聞く名所は、歎異抄である。耳をたつればなつかしやあなたごなたの木がくれに鳴く音をもらすほととぎす、と歌にあるように、きき耳立てて、歎異抄の山にの

納屋に押しこみますが、その火鉢をあつかうと同様なおこないしか出来ない身と知らされ、そこに行き詰りました。

次で一灯園の懺悔の生活の門を叩き、下座行を教えられたけれど、行けども行けども頭の下らぬ身、みのるほど頭のさがる稲穂かな、とはあべこべで、カラッポの私は頭がどうしても下らぬ、底抜けの愚さに突き当りました。

そうした私は、篤信の伯父が「そこまで行き詰ったのか、歎異抄を読め」といって、勧めてくれました。一読して心うたれましたのが、今の一句でありました。何処にもよるべを失っていた私に、唯一無二のよるべをそこに開いて下さった慈声であります。こうした広大無辺なお声はそれまで一度も聞いたことがありませんし、六十二歳の今日も、他所で大きくこの出来ない稀有の声であります。

次に矢張り第一章の

「そのゆえは罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがため願にまします。しかれば本願を信ぜんには他の善も惡にあらず念仏にまざるべき善なき故に、惡をもおそれなし、本願をさまたぐるほどの惡なきが故に」
の実語であります。

罪惡深重、煩惱熾盛の衆生を誰がお相手下さるでありましょうか。戦時中に、前科七犯で最後に殺人強盜の罪名で

処刑されたN君のことを思い浮べます。親はずでに亡くなっていましたので五人の兄や姉に最後の音信をしましたが、端書一枚も返信のない時、

「これは私の罪業があまりに深いので、兄や姉達が今までに差し延べてくれました温い手を、しびらせ、凍らせてしまったのです。この血を分けた兄姉からも呆れられる極悪の私に仏様ばかりが温い御手をさしおべて下さいます。生死の世界に仏ましますれば生死なしであります」と念仏の中に浄土に帰りました。このN君の最後の告白こそ私自身の姿であります。「価値の無いものを愛するということは自分には不可能である」とルーテルが語って居りますが、この無価値の者を捨てたまわずして、やがて瓦礫を黄金に転成して下さる方においてのみ、この金言が述べられるのであります。

次に第九章

「念仏申し候えども踊躍歡喜のころおろそかに候こと、またいそぎ浄土に参りたき心の候わぬは如何に候べきことにて候うらんと申しいれて候いしかば、

親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり……」

とあります中に、唯円房と同座して下さる聖人を知らされ

じられます。共に悲しむことは、共に喜ぶことと表と裏の関係で、そのむつかしさには変りはありません。ツルゲネフの「君は泣いた」という詩に

「君は泣いた、私の不幸に。」

君の同情が身にしみても泣いた。

だが君も、自分の不幸に泣いたのではないか！

それをただ私のうちに見ただけではないのか！

と述べていますが、飽くなき利己の一念を如何ともすることの出来ない身知らされる警句であります。

見渡す限り、共に喜び、共に悲しむ、ということとは、自分に出来ないし、他人に要求すべきことでもありません。

この荒寥たる人生の闇夜に、たった一つのともしびは、

「衆生の苦悩は、わが苦悩なり」

衆生の安樂は、わが安樂なり」

と飽くまでも同座して下さる弥陀仏ましますのみであります。

さてここで「親鸞もこの不審ありつるに唯円房おなじころにてありけり」とさりげなく同座して下さる聖人の中に、仏のみ声が聞こえるではありませんか。

私は長い年月、聖人をお慕い申して来ましたが、そして聖人の御理解の深さ、御同情の篤さにひかれて驚き讃えて居

ると共に、こうした声が地上の何処に聞き得ましようか、と唯その不可思議さに驚喜せしめられるのであります。

最近読みましたものに、ドイツの作家リヒテルの言葉がありました、それは

「人の悲しみを悲しむことは凡人と雖も可能であるが、人の喜びを喜ぶことは天使にあらざれば不可能である」という一句であります。それについて思いあわせませうのが

盲人で琴の名手の宮城道雄氏の隨筆に

「人々が悲しみあう声をきくと陽の音調がする

人々が喜びあう声をきくと陰の音調がする」

という一句であります。欲も多く、いかり、そねみ、ね

たむころのみち／＼た私共には、人の不幸に対して口では気の毒と慰めながら心は明るい陽の調子になり、人々の成功などを口では御同慶にたえぬとほめながら心は沈んで陰の調子になります。宮城氏は肉眼こそは見えないが、鋭い耳でそれを聞きとられているのであります。

期せずして東西呼応した二人の言葉は鏡として私自身を省みませう時、自分ながらにあきれはてる浅聞しさに言葉も絶えるのを覚えます。

リヒテルは、共に喜びあうことは人間として不可能であるときびしくは申しておりますが、共に悲しみあうことは

凡人にも可能であるというところにまだ内省の甘さが感

りました、それは、

「小慈小悲もなき身にて有情利益は思うまじ」

とか

「小慈小悲もなければ名利に人師このむなり」

と告白される聖人御自身のものではありません。それは

丁度、夜空に皎々と輝く月光は、月の放つものではなくて、太陽の光の照り返しに過ぎないのと同じであります。

聖人は御晩年の悲歎述懐和讃に

浄土真宗に帰すれども真実の心はありがたし

虚仮不実のわが身にて清浄の心もさらになし

外儀のすがたはひとごと賢善精進現世しむ

貧賤邪偽おおきゆえ奸詐もはし身にみたり

悪性さらにやめ難しころは蛇蝎のごとくなり

修善も雑毒なるゆえに虚仮の行とそなづけたる

無慚無愧のこの身にてまことの心はなけれど

弥陀の廻向の御名なれば功德は十方にみちた

まう

とお述べになり、又聖人の御物語りには

「更に親鸞めずらしき法をも弘めず、如来の教法をわれも信じ人にも教え聞かしむるばかりなり」

と、明らかに、弥陀仏の徳光のひとり働きを讃えていられます。

さて、私共と同座して下さって、共に喜び、共に悲しんで下さる聖人、それは弥陀仏の超日月光に浄化せられた、聖人にして聖人ならぬ徳光であります。よきにつけ、あしきにつけて「弥陀五劫思惟の願」を「親鸞一人がため」と頂かれて念仏申される聖人の上に、自然に建現される、大悲常行の尊容であります。

聖人の煩惱の薪に、如来の浄火が点じられて、煩惱に即して煩惱のあろう限りを焼きつくされて行く、その聖人の信火が、欲も多く、いかり、そねみ、ねたむ心のみち／＼た私共の煩惱の薪に、点火して下さるのであります。

蓮如上人御一代聞書の七十五項に、

「聖人の御一流は、阿・弥・陀・如・来・の・御・説・（御仰せ）なり。されば御文には、阿・弥・陀・如・来・の・仰・せ・ら・れ・け・る・よ・う・は、とあそばされ候」

又、同、一二四項に、

「御文は、如来の直説なりと、存すべきの由に候」

とありますのは、蓮如上人の御文を拝読しながら、そこに如来の御声のきこえぬ者への警告であります。

このことは歎異抄を拝読する者の上にも同じことが申せるのであります。切角歎異抄の山にのぼりながら、如来のみ声を聞かずに、唯聖人のお言葉とのみ思い、あきらかに

その源に気づかないならば、人間の理解、人間の親切と聞くにとどまるのであります。

最近、原始仏教の研究がさかんになりまして、その発表が沢山出ますにつけて、真宗とか、禅宗とか、天台とか、真言といった後世に発達したものをすてて、直きに釈尊の研究を梵語やパーリ語で学んで行こうとする学徒が多くなりました。それはそれでよいと思えますけれど、真に仏意を体得せられた高僧に直参すると共に、それがそのまゝ、真実の釈尊の本懐に帰する道こそ大切と思ひます。

他人様はさておきまして、愚鈍の私には、聖人の御声を聞き、そのまゝま、七祖、釈尊、そして弥陀仏の御喚び声を聞かして頂く、そこに「如来常住にして変易あることなき」久遠の導きを蒙るほかに道はありません。

しかも聖人の御著書は色々ありますけれど、簡結で、且つ私共の生活に即してお導きを頂ける歎異抄は、座右に置いて、繰り返し拝読したいものであります。現に日本人でこの抄によって信眼を開かれた方々は無数に居られます。実に本抄こそ弥陀如来が聖人をおして私共に与えられた宝典であります。

歎異抄讃歌

こよなくも くしきみたから

他力の慈悲

ここにみちみつ。
さえられぬ とわのみひかり
ここにかがやく。
きよらにて つきぬましみず
ここにわきいず。

旅人よ あおぎみよ
世に生れし ねがいみてろう。
旅人よ とりてよめ
とわのやみ そこにひらけむ。
旅人よ 汲みてとれ
かわける身 そこにうるおう。

ひかりあやなす まことのことは
あめつちのはてばてまでも
ひたぶるに われはたたえむ。

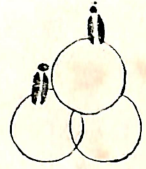
聚墨生

「智度論」の中に龍樹菩薩は、次の譬を説かれている。
「二人の青年が同時に各々が親しき父母とか兄弟とかが深い淵におちて溺れているのを発見したとする。その時一人はたちまち身を躍らして飛びこみ、あろう限りの努力をして救いあげようとしたが、力およばず、かえって諸共に水に沈んでしまった。今一人は遠くへ駆け出して行って一雙の舟を見つけたし、これを操縦して現場に行き、溺れる者を皆救いあげることが出来た」と。

迷うている苦悩の人々を救う道も亦この通りで、先ず自ら大悲の願船にのり、自由自在なはたらきをもって、生死の海に浮んで、救い遂げることが出来るというものだ。

（安樂集下、第八門）





あとがき

本年は季候が不順で、老人や病弱の人々の多く死去されましたことは珍しい数と聞きます。又六十年來の凶作の天候と一致して居るとか氣象觀測所の発表がありました。

いたずらにおそれず、また油断せず、念仏裡に過ぎて頂きましょう。

近角先生の歎異抄十章と十一章と十二章の御講話が「求道」に発表してありましたので、順次頂きたいと存じます。十三章はすでに三回に分けて御紹介申し上げましたので、十二章で終らせて頂きます。

「癌告知可否を讀んで」の高原先生の御原稿は、九大医報の「随想」の中から頂きました。まことに尊い記録であります。最近、名古屋市の方で乳癌で四回手術をうけられて、急に衰弱され、転移も各所に出て亡くなられた方があります。幸に母堂の

篤信に導かれて、念仏裡に安らかに往生せられました。其方からのお手紙に癌研の入院患者の種々の苦悩の有様をくわしく報告をうけましたが、「高層ビルの地階から出火し、段々おいつめられて行く身に、地上に消防の方の手に張られた救助網と、サア早く飛びおりよ、との呼び声一つが、たつたひとつのすくいである」との高原先生の教えを有難く知らされました。

○

上杉真証師は御尊父が近角先生の御導きを篤くおよろこびになられた方で、そのため先生の御著書を青年の頃から常に拝読されている方でもあります。「大乘」に発表されましたものを一回におさめまして、抄出させて頂きました。福島先生の歌に

おなじ世に おなじ仏のむねに生くる
久遠の友を恋いさすらう
とありますが、同一念仏の友が名乗り出て下さることは本当にうれいことでありま

す。「仏の音声を聞く」の私の原稿は、聖人の仰せの中に、異様なおどろきを覚えまますまを述べました。本当によきひと、聖人におあい出来ましたことであります。盲の亀が広い海で浮木にあう如し、と昔からたとえられました。文字通りそのよろこびであります。

御 案 内

○毎月第一、二、三日曜、午後一時半
* 一道会例会。

市電新郊通一丁目下車、東へ一丁半。
○毎月廿四日、午前午後、昭和区小桜町
* 教西寺法話会。

市電御器所通り下車、桜花学園の東。

○七月七日午後二時、尾西市三条板倉
* 蓮光寺修道会。歎異抄七章讚仰。

○七月八、九日。桑名市萱町
* 法盛寺法話会。

× × ×

定 価 半年 二百円 (送共)
一年 四百円 (送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人 花 田 正 夫

要知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷 人 本 田 政 雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行 所 慈 光 社

振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光第十七卷第六号 昭和四十年六月十五日発行 (毎月一回十五日発行)
昭和二十四年七月十三日第三種郵便物認可